

展示作品リスト

No.	指定 名称	作者、出土、伝来 時代	所蔵番号 (寄贈)
1	重要雑録 大正七～十五年	東京帝室博物館編 大正7～15年 (1918～26)	館史資料688
2	大震災関係書類 大正十二年九月	東京帝室博物館編 大正12年 (1923) 9月	館史資料287
3	上野公園バラック配置図	大正時代・20世紀	P-4140
4	大正震災焼跡写生図 上野駅址	田代二見筆 大正12年 (1923)	A-10118-41 (田代二見氏寄贈)
5	大正震災焼跡写生図 上野公園における避難民とバラック	田代二見筆 大正12年 (1923)	A-10118-42 (田代二見氏寄贈)
6	馬形埴輪	群馬県伊勢崎市境下武士1917出土 古墳時代・6世紀	J-7852
7	子持装飾付脚付壺	岡山県瀬戸内市牛窓町樋ヶ谷出土 古墳時代・6世紀	J-6455
8	◎ 如来立像	飛鳥時代・7世紀	N-152 (法隆寺献納宝物)
9	錆絵山水図水指	仁清 江戸時代・17世紀	G-4324 (島居千代松氏寄贈)
10	多宝塔	飾屋八五郎作 江戸時代・19世紀	E-13006
11	生人形 徳川時代花見女中体 島田髷立姿	三代安本亀八作 明治時代・20世紀	I-1082 (日英博覧会事務局寄贈)
12	生人形 徳川時代大名体	三代安本亀八作 明治時代・20世紀	I-865
13	青磁貼花牡丹唐草文花瓶	中国・龍泉窯 元時代・13～14世紀	TG-610 (海運会社辰馬商会寄贈)
14	東京帝室博物館建築感賞設計図集	財団法人帝室博物館復興翼賛会 昭和6年 (1931)	館史資料844
15	徳川家康像 (模本)	森田亀太郎模 大正～昭和時代・20世紀 原本：重要文化財 狩野探幽筆 江戸時代・17世紀 板木・輪王寺蔵	A-9717
16	浅井長政夫人像 (模本)	森田亀太郎模 大正～昭和時代・20世紀 原本：重要文化財 安土桃山～江戸時代・16～17世紀 和歌山・持明院蔵	A-9705
17	木画紫檀双六局 (模造)	木内省古作 昭和7年 (1932) 原品：正倉院宝物 奈良時代・8世紀	H-1139
18	銀平脱鏡箱 (模造)	吉田立齋作 昭和8年 (1933) 原品：正倉院宝物 奈良時代・8世紀	H-1143
19	頸甲・肩甲 (模造)	伊藤英一作 昭和時代・20世紀 原品：福井県永平寺町 二本松山古墳出土 古墳時代・5世紀	J-20122 (伊藤英一氏寄贈)
20	金銅迦陵頻伽文華蓋 (模造)	山脇洋二作 昭和時代・20世紀 原品：国宝 平安時代・12世紀 岩手・中尊寺蔵	E-13831
21	銀銅蛭巻太刀 (模造)	三浦助市作 昭和12年 (1937) 原品：国宝 平安時代・12世紀 和歌山・丹生都比売神社蔵	F-17325
22	伝護良親王御直垂 (模造)	高田義男作 昭和8年 (1933) 原品：南北朝時代・14世紀 東京国立博物館蔵	I-464
23	表着 (模造) 萌黄地小葵桐竹鳳凰模様二階織物	高田義男作 昭和11年 (1936) 原品：重要文化財 室町時代・15世紀 愛知・熱田神宮蔵	I-1444
24	東京帝室博物館被災関係写真	大正12年 (1923)	
25	復興本館建設関係写真	昭和時代・20世紀	
26	花下遊楽図屏風 (複製)	キャノン株式会社 平成30年 (2018) 原本：国宝 狩野長信筆 江戸時代・17世紀	

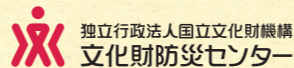
◎：重要文化財 Important Cultural Property
 ・No. 22：前期展示 (7/11～8/6)、No. 23：後期展示 (8/8～9/3)、No. 24とNo. 25：前・後期で入れ替え

文化財防災への取り組み

— 文化財防災センターの設置と活動 —

日本は自然豊かで四季折々に美しい景観が見られる一方、自然災害が多く発生することで知られています。とりわけ、地震や風水害などにより、貴重な文化財が破損、滅失することも少なくありません。また、文化財には木や紙などの燃えやすい材質が多く使われており、火災による文化財の焼失も後を絶ちません。

そのような課題を背景として、令和2年(2020)10月1日、独立行政法人国立文化財機構に文化財防災センターが設置され、わが国の多様な文化財を災害からまもり伝えるため、さまざまな事業を推進しています。災害発生時には文化財の救援活動に対する支援などを行ない、平時には外部機関・団体との連携体制の構築や、防災・減災に関する技術開発などに取り組んでおり、東京国立博物館もこれらの活動に協力しています。文化財防災センターの詳しい活動内容は、ウェブサイト (<https://ch-drm.nich.go.jp/>) をご覧ください。



活動の一つとして、博物館・美術館の展示室を再現し、地震の揺れによる室内被害を検証した(写真は防災科学技術研究所 兵庫耐震工学研究センター)。



特集 関東大震災と東京国立博物館

令和5年(2023)7月11日発行

執筆：黄川田翔、佐藤寛介 撮影：藤瀬雄輔、吉岡由哲ほか 翻訳：ミウシュ・ヴォズニ (以上、東京国立博物館)

制作・印刷：精興社 編集・発行：東京国立博物館、文化財防災センター

© 2023 東京国立博物館、文化財防災センター Tokyo National Museum, and Cultural Heritage Disaster Risk Management Center

特集 関東大震災と
東京国立博物館

Thematic Exhibition

The Great Kantō Earthquake and
the Tokyo National Museum

令和5年(2023)7月11日(火)～9月3日(日)

東京国立博物館 本館特別2室



令和5年(2023)、発生から100年を迎えた関東大震災は、日本の災害史に残る大きな出来事でした。

そして、東京国立博物館の前身である東京帝室博物館にも甚大な被害をもたらし、博物館の歴史にとって重要な転機となりました。

本特集では、この未曾有の大災害における当館の被害の実態と、復興の歩みを紹介します。

The Great Kantō Earthquake struck Tokyo one hundred years ago in 1923, leaving an indelible mark on Japan's history. The earthquake also severely damaged the Tokyo Imperial Museum, the precursor to the Tokyo National Museum, heralding a turning point in the Museum's history. This exhibition explores the extent of the damage and traces the Museum's recovery following this unprecedented disaster.

24 東京帝室博物館
被災関係写真

Photographs Related to the
Disaster at the Tokyo Imperial
Museum

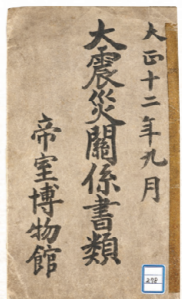
正面玄関部分が大きく崩落した
第1号館(旧本館)。

関東大震災と
上野公園



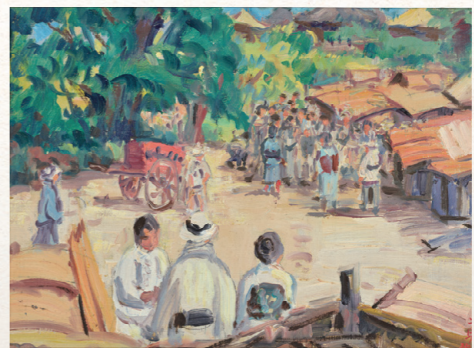
大正12年(1923)9月1日(土)午前11時58分頃、相模湾北西部から房総半島南部を震源とするマグニチュード7.9と推定される巨大地震が発生しました。さらに、地震により引き起こされた建物倒壊、火災、津波、土砂崩れなどによって被害が拡大し、東京、横浜などの首都圏を中心に、被害家屋37万棟以上、死者・行方不明者約10万5千人にのぼる、近代日本において最大規模の災害となりました。これを「関東大震災」と呼んでいます。

東京では東部の下町地域のほとんどが焼失したため、上野公園に多くの避難者が押し寄せ、その数は一時50万人にのぼったとみられます。震災後、上野公園内には200棟以上のバラック(仮設住宅)が建設されて、一時約1万人が暮らすとともに、既存建物を転用した各種救援施設も開設されて、約1年半にわたり被災者の避難所として利用されました。当時、上野公園を管轄していた当館には、バラック建設などの記録や、震災被害の写生図が残されています。



2 大震災関係書類
大正十二年九月
Documents Related to the
Great Kantō Earthquake

避難所となった上野公園の
バラック建設や施設利用に
関する記録。



5 大正震災焼跡写生図
上野公園における避難民とバラック

Sketches of Fire-Ravaged Tokyo after the Great
Taishō Earthquake: Refugees and Temporary
Buildings in Ueno Park

震災の被害や避難の様子を描いた計54枚の
写生図の一つ。



3 上野公園バラック配置図
Plans for Temporary Buildings in
Ueno Park

上野公園では、おもに中央の竹の台と
不忍池の周辺にバラックが建設された。

被害の実態と被災した文化財

震災によって、当館でも展示施設の損壊や収蔵品の破損などの被害があり、一時閉館せざるを得ませんでした。とくに、明治14年(1881)に完成したジョサイア・コンドル設計による煉瓦造の第1号館(旧本館)は、正面玄関部分が大きく崩落して使用不可能となり、のちに取り壊されました。地震発生時は開館中でしたが、幸いことに死傷者はいませんでした。収蔵品の被害は、御物が9件、寄託品が国宝(旧国宝)2件を含む39件、所蔵品が89件にのぼりました。展示室の被害状況写真にみえる展示品の一部は、修復されて現存しています。

震災の翌年4月、博物館は一般公開を再開します。展示施設は唯一無事だった表慶館に限られました。そして大正14年(1925)、震災によって収蔵品のほとんどを失った東京博物館(現 国立科学博物館)に天産(自然史)資料を譲渡したことで、歴史・美術博物館としての性格を明確にしました。さらに、特別展の開催や調査研究成果の刊行、講演会や展示解説の実施など、困難な状況のなかであって、意欲的な博物館活動を展開しました。



震災後、旧本館前で撮られた職員の写真。足元には崩落した煉瓦が積み重なっている。



6 馬形埴輪
Tomb Sculpture (Haniwa): Horse
残存幅約118cmと大型の埴輪で重量があるため、展示ケースのガラスを突き破って落下した。

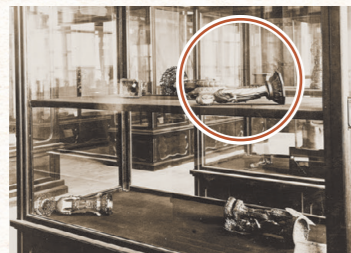


被災状況

11 生人形 徳川時代花見女中体 島田髷立姿
“Living” Doll: Woman of the Tokugawa Period Viewing Cherry Blossoms; Shimada Hairstyle
当時は、「生人形」といわれる等身大のリアルな人形に衣装を着せて展示していた。



被災状況

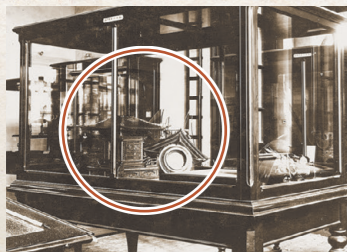


被災状況

8 ◎ 如来立像
Buddha
飛鳥時代の金銅仏。立像は重心が高いため、多くが転倒した。



10 多宝塔
Many-Jeweled Pagoda
銅製の小型多宝塔。円筒形の上層が外れて落下している。



被災状況



被災状況

13 青磁貼花牡丹唐草文花瓶
Flower Vase with Peony Vines
高さ69.5cmの大型花瓶。転倒して胴部が大きく割れてしまったが、のちに修復された。



14 東京帝室博物館建築懸賞設計図集

Submissions for the Architectural Design Competition at the Tokyo Imperial Museum



渡辺仁による応募図案。実際に建てられた復興本館とは、屋根や正面車寄せの形状などが異なる。

25 復興本館建設関係写真 Photographs Related to the Reconstruction of the Honkan



建設中の復興本館。鉄骨が組み上がっている。



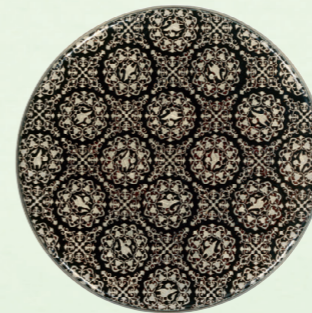
完成当時の復興本館。正面玄関手前のユリノキが現在よりもかなり小さい。

文化財の模写・模造

震災後の博物館活動で注目されるのが、当館の創立期から行なわれてきた文化財の模写・模造です。関東大震災では、多くの優れた文化財が焼失したことから、あらためて文化財の価値とその保存の重要性が認識されました。そして、博物館の復興方針の一つとして、文化財の現状記録や復元を試みる模写・模造が各分野で活発に行なわれました。こうした模写・模造は、調査研究の進展や伝統技術の継承に加え、博物館の展示内容の充実にも大きく寄与しました。

18 銀平脱鏡箱 (模造)
Mirror Box (Copy)

正倉院宝物の模造。平脱は器物の表面に金や銀の薄板を漆で塗り込めた後に、金属部分の漆膜を剥ぎ取って文様を表わす漆芸の技法。



21 銀銅蛭巻太刀 (模造)
Spiral-Wrapped Sword Mounting (Hirumaki no Tachi; Copy)
鍍銀した銅板をらせん状に巻き付けた蛭巻太刀の復元模造。製作当初の豪華華麗な造形が見どころ。

復興本館の建設

関東大震災から5年後の昭和3年(1928)、昭和天皇のご即位を機に帝室博物館復興翼賛会が結成され、官民共同による復興本館(現本館)の建設が具体化します。建築設計調査委員会による科学的・工学的調査と、当時まだ珍しかった公募審査で選ばれた、建築家渡辺仁による「帝冠様式」と呼ばれる設計案にもとづき、震災の教訓をいかした耐震耐火性能を備えた巨大博物館が計画され、昭和13年(1938)に開館しました。あわせて、組織改革、展示構成の刷新が図られ、今につながる博物館活動の礎が築かれました。



16 浅井長政夫人像 (模本)
The Wife of the Samurai Warlord Azai Nagamasa (Copy)
織田信長の妹、お市の方の肖像画。当館には、作者の森田亀太郎による模本が100点以上収蔵されている。

22 伝護良親王御直垂 (模造)
Formal Jacket and Trousers (Hitatare) Reportedly Owned by Imperial Prince Moriyoshi (Copy)

作者の高田義男は染織品の復元模造を数多く手掛け、途絶えていた染織技法の再現にも取り組んだ。

